# メモリーズ・オブ・ユー
## ー（玉龍グラフィティー2）ー

浜崎　隆（4組）

**プロローグ（少年時代のメモリー）**

古い記憶は、脳の大脳皮質という部分に納められていると聞きますが、昔を思い出そうとすれば、過ぎ去った日々の断片が限りもないほど溢れ出て来ます。時がたつほど過去の風景は輝きを増し、ひたすら懐かしさを誘います。

仕事をさぼる事の譬えを油を売ると申しますが、それは昔、油を計り売りしていた頃、枡の滴が空になる間、客と喋っていた事からきた譬えです。

我が家は菜種を搾り、その油を売る事を生業として、明治四十二年以来、三代にわたって携わってまいりました。遅々とした牛の歩みにも似た足跡ですが、今年で百五年を迎えます。

その永い年月の中で、耐え難い悪夢の様な試練の時がありました。まだ幼稚園の頃、深夜、海岸に出港をひかえた軍艦に向う兵隊さんのザック、ザックという軍靴の響が毎晩聞かれるようになりました。祖母や母は、ご無事でと祈っていました。やがて戦火は私達の身辺にも及び、度重なる空襲の後、終戦を迎えました。

祖父と父が営々と築いた工場も家屋も、昭和二十年六月十七日の空襲で灰燼に帰しました。幾つもの満杯のタンクは一ヶ月以上の間燃え続け、焼け跡から桜島や山形屋は勿論、二中のドームが見えました。

戦争を物語る一枚のセピア色の写真があります。勝利を願って、**父が帝国海軍に高射機関砲を寄付し、表彰された時のものです。**海軍贔屓の祖父は、私達が墓参りに来る時は剣を吊って来い。そしたら墓石を動かすっど、と言ってたそうです。

私の戦争記憶は、天文館の文化通りから電車通りを高見馬場に曲がる角の福徳ビル添いに、ずらっと並べられた黒焦げの死体と、照国神社の表参道添いに並べられた黒焦げの死体です。そして、焼夷弾で燃え盛る家屋の焔が、空を真っ赤に染めあげる様。悪夢としか言いようのない地獄絵図でした。戦後は、都市計画で土地も削られ、色々な事があったようです。

その当時は、何処も大変だった時代ですね。私達が生まれた頃、戦争が始まり、物心ついた頃は、空襲で防空壕に入り、そして田舎へ疎開、戦後は、お腹をすかせて甘いものに飢えていました。

**私達は、戦前派、戦中派、それとも戦後派？**

幼なすぎてどの派にも属する気がする。私達までが、カタカナ教育でしたが。

ついこの間までは敵国であり、鬼畜米英とか言っていたのに、今や国同士も同盟国である。あの戦争は一体何だったのだろうと、反戦意識が脳裏を掠める。そのアメリカ自体も大きく変わった。

過ぎてみると随分昔みたいだが、今、二〇一四年でまだ戦後六十九年だ。大リーグ最初の黒人選手ジャッキー・ロビンソンが、ドジャースのユニフォーム姿で「孤立感や差別扱いとの闘い」を始めてから六十七年、ジョン・フィッツジェラルド・ケネディ暗殺は五十一年前、「私には夢がある。いつの日か子供達が肌の色でなく、人格によって評価される国に住めるように」この言葉を歴史に残す公民権運動の指導者、キング牧師が暗殺されて今年で四十六年になる。

振り返ってみると「ただ過ぎに過ぐるもの、帆かけたる舟、人の齢、春夏秋冬」枕草子の一節を思い起こす。もう会えなくなった人も数多くなった。面影を忍びつつ指折り数える時がある。

お正月、照国神社から恒例のサーカスのある松原神社まで、人の流れが連なって往き来していた頃、玉龍高校二年のお正月だったと思う。私は附中時代の親友と映画館の立ち並ぶ天文館を人ごみに揉まれながら歩いていた。

華やかに着飾った和服姿の女性を振り返ってみたり、クジを買うと砂糖で作った鯛が当たる、呼び込みの口上を聞いたり、お正月の雰囲気に気持ちが昂揚していた。

人ごみの中から突然現れた、**桜井敦子さん、平澤希代子さん**とお正月のご挨拶を

交わすうち、親友の唐湊の家に行くことになった。お昼を御馳走になったあと、皆で映画を観ようと、また天文館に引き返すことになり、市電に乗った。

丁度、中洲陸橋を過ぎた所で急停車した。乗客のざわめきにただならぬ気配を感じ飛び降りた。目の前の銭湯が黒煙と炎に包まれて、逃げ惑う人達が見える。お正月の真っ昼間、スッポンポンの銭湯の客が、かろうじて前を押さえながら逃げ出してきた。あわてふためく姿が必死なほど滑稽に見えた。だが、お正月早々の災難を気の毒で笑えなかった。後々、想い出しては笑ってしまったが。

さて、天文館に引き返した四人は日東劇場に入った。あの頃の映画館はいつも観客が多かったが、正月は立錐の余地もない程だった。四人散り散りばらばらで、座れるどころじゃない。終わって場内が明るくなると、あっそこに居たの、良く見れた?面白かったね、それじゃさよならといった次第だった。

**桜井（有馬）さん**とは小学一年生からず～っと一緒で、大きな家、広い庭のお宅に何回か遊びに行った。敦子さんは犬好きで綺麗に手入れした毛並みのスピッツをいつも抱っこしていた。敦子さんのお通夜の時は、ポメラニアンが鳴き続けていた。

彼女に貰った指先程の犬の人形がある。口とお尻に磁石の付いた、黒と茶色の陶器のテリヤ二匹。側に寄せるとパッとくっついたり、くるりと後ろを向いたり。今は犬好きの敦子さんの想い出の品となった。今でも平澤さんは、敦子さんの想い出を昨日のことのように語る。

一緒に執行委員をした**羽生周史君**は、卒業以来消息が解らず、いつか死亡扱いになっていました。或る日、新聞の死亡広告の欄に喪主に続いて周史君の名前があり、そのお宅に恐る恐る電話してみました。私の勘は当り、卒業以来何十年ぶりに彼の声を聞きました。後日、彼と再会を果し、天文館で痛飲。握手したり、ハグしたり。クラゲ、イーチャン、ピタゴラス、スズメに小迫、青柳、今村、門内先生等、畏れ多い諸先生方の話で盛り上がりました。

「長崎に来たら、お返しするよ」と言ってくれましたが、実現しないうちに本当に亡くなってしまいました。彼のお墓は、長崎の高台に鹿児島を向いて建っているといいます。童顔の彼が懐かしい。

**源五郎丸紀保君**と言う、珍しい名前の同級生がいた。体育の時間、後迫先生が短パンに源の一字のみ書いてあるのを見て、君は姓は源、名は五郎丸紀保か、と聞かれたことがあった。先生のジョークに、長すぎるので略しました。と、はにかんでいた。卒業以来会う機会がないが、珍しい名前の彼を懐かしく思う。

熊本の高校を訪問する機会があった。引率の**後迫先生**と陸上部の**徳留君**と私の三人で、濟々黌、熊本高校、熊本工業高校の門をくぐった。どの高校も校舎の綺麗なことと、体育館が立派で大きかった。

訪問先では丁重に応対された分、帰ってからの御礼状書きとレポート提出が大変だった。宿の夕食は量も多く持て余していると、食べ盛りの若いもんがこれ位なんだと、小気味のいいテンポで料理を口に運ばれる先生の健啖ぶりに、しばし見とれていた。

食後、腹ごなしに夜の町へ出かけた。繁華街の暗がりに女の人がずらりと並んでいる一角があった。先生が「どんな人達か知っちょっか」と尋ねられた。「よく憶えとけよ、この風景は歴史の一頁やっど」と。

戦後、困窮した人達が辿った悲しい現実も、私達の高校卒業の昭和三十三年「売春禁止法」の名のもとに消え去った。戦後十三年、所得倍増論で、これから高度成長への道すじが出来つつある頃である。

先日読み返した八期会通信第三号の「ヤアヤアヤア」と題して書いた文に、大事な人を書き忘れていた事に気付いた。

甲子園球児の**北薗泰一君**は、常勝玉龍の中核にあり、打撃、走塁、守備と三拍子揃ったいい選手だった。バスケットボールの**別府いずみさん**は、おしとやかな方だが、ひと度コートに立つと人が違うような機敏な動きをするいいプレイヤーだった。

浪曲森の石松次郎長代参の台詞に「何か大事なお方をお忘れじゃござんせんか」と言うのがあるが、お二方お腹立ちだった事でしょう。それぞれ実績のある名選手に、何と失礼な事をしてしまったものか、御免なさい。

**萩原ルミさん**の店「ウサギとカメ」に入ると、すぐ目につく裸婦の油絵があった。元気な声のお姉様達が「いらっしゃいませ」とお出迎えをすると、私はその絵に「今晩は」と挨拶したものだ。

同窓会の二次会は「ウサギとカメ」が合言葉のように行き渡り、八期の皆さんで超満員だった。**堀添君**に、**吉松典子さん**が描いた絵だよと教えたら「自画像じゃろかい」とニコッと笑った。私もそれは気になっていた。

あの絵は今、何処にあるのだろうか。ルミさんが亡くなり、お店を閉める前になんとか手に入らなかったものか、心残りである。自画像か否かは別として好きな絵だった。

ルミさんは歌が上手かった。歌い手揃いの八期会の中でも抜きん出ていた。薬師丸ひろ子の「セーラー服と機関銃」は、彼女の十八番で聞く人を唸らせた。芸達者なルミさんは踊りも抜群だった。予餞会で沖縄舞謡を踊った。

男役の**具志さん**と女役のルミさんが「谷茶前」（たんちゃめ）とかいう踊りで、小太鼓と蛇味線とハイッサ、ハイッサと相の手が入るリズミカルなテンポの早い踊りだった。五十数年前の身ぶり手ぶりと足さばき、弾む様なリズムが甦ってくる。

ウサギとカメの開店祝いに頂いた大きな湯呑み茶碗がある。豪快な筆遣いで私の名前が書いてある。大き過ぎるので、それではお茶は呑まない。いまは、食器棚の真中にデンと構えて、木のスプーンや蓮華を入れるのに便利。食事の度に彼女と顔を合わすようなものだ。

還暦祝いのラスベガス旅行を楽しみにして「はよ行こごちゃ、待っちけんごっあっ」.と会う度に言っていました。世話やきの彼女は、きっと私達の為に、天国のいい場所を取って下さってることでしょう。八期会御席とか言って。

「あなた達はゆっくりでいいから、土産話をいっぱい聞かせてね」と言うような気がする。

第七回渋谷・鹿児島おはら祭りが今年も盛大に行われた、関東五十三連、鹿児島十一連の計二千三百人が、色鮮やかな衣装で「ヨイヤサー」の掛け声を上げながら踊った。ルミさんは祭りの立ち上げから参加、踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損々と、踊る阿呆を楽しんでいた。

**門内先生のお葬式**に、**大石くん**と参列した時のこと。周りは一見してバレー関係の方達と解る、見上げる程の背の高い方達だった。

ご子息が、御礼の言葉を述べられた。

私は父との楽しい思い出が無い。小さい時から休日に何処かに連れて行ってもらった事も無い。日曜祭日は、バレーボールの大会や対外試合で家には居なかった。家庭を顧みない父に反感を抱いたこともありました。しかし、今日こんなに沢山の方にご参列、お見送り頂きまして、父はこんなにも皆様に愛されていたのだと嬉しく思います。

送る言葉は、いつも悲しみに満ちているが、この時は父を慕う御子息の思いに感動して、目頭が熱くなった。

マルヤガーデンの忘年会の時、喜寿のお祝いに**濃紫のセーター**を八期会からプレゼントした。あの時の笑顔を今もはっきり思い出す。

放課後、**岩井英一君**とジャレあっていたら、空の弁当箱を渡り廊下の上に放り投げられてしまった。箒も届かず、梯子も無い。校舎の窓から渡り廊下の上に飛び乗るのが手っ取り早いと、窓の下の洗面台に乗った。一・二・三で窓に乗ろうと踏ん張った途端、バリバリッと足下の洗面台が壊れてしまった。

弁当箱ぐらいで大変な失敗をしてしまった。これはまず池畑校長に報告して、謝罪、そして弁償しなければと校長室に行ったがご不在だった。取敢えず事務室に事情を説明して帰宅した。

翌日謝罪すると「君が壊したのか、いつ、何で」と厳しいお叱りを受けた。事務室から未だ報告がなく、今朝校内を一巡された時、気付かれたそうで、事の次第が解ると市の備品の破損は、市に報告をせんとならん。弁償はせんでいい。よく反省しなさい。とお許しを頂いた。厳しいが、温情ある校長先生だった。迷惑を掛けた者だけが知る、お人柄である。

校門の手前で授業始めのサイレンが鳴った。遅刻をチェックする校門を避けて、島津家のお墓に通じる坂道を走る。鞄を先に放り投げて石垣にしがみついて上がると、目の前に靴。見上げると、なんと**池畑校長**が私の鞄を持って立っていらした。「君はいつもここから入っとか」の声に、慌てて飛び降り、全力疾走で校門から入り直し鞄を受け取った。校長先生は校内の総てを熟知しておられる。

次の日に校門から入ると、服装チェックで係の**小川藍子さん**（愛称アイチャン）に注意された。連日の不祥事で素直になれず、ついゴネてしまいました。

「違反です」「イイエ違います」の繰り返しで、彼女を怒らせてしまった。「今更遅いけど御免なさい」怒った顔も素敵でした。アイチャンは太郎の嫁になる、そんな歌が流行っていた頃でした。

トイレの掃除当番が嫌で、早く済まそうと一人がドアを開け、もう一人がバケツ一杯の水をバシャットぶちまけた途端ドアを締める。早い早い、ものの五分もあれば終わる。

そんな雑な掃除をしていた或る日、**池畑校長先生**が掃除の見廻りにいらした。慌ててタワシで磨いたり、雑巾で拭いたり、予てした事の無い丁寧な掃除をした。そんな付け焼刃の様な掃除を見透かす様に、予て通りの掃除をして見せてくれと仰った。皆黙っていると、この所、汲み取り料が物凄く上がっている。今日のようにタワシと雑巾で、丁寧な掃除をあと一ヶ月、君たちにやって貰おう。校長先生の目は誤魔化せない、総てお見通しである。

朝寝坊と朝食抜きは私の定番で、毎朝寄って呉れる**徳永君**に鞄を託し、先に行って貰う。お味噌汁だけでもと、母の声を振り切って家を出る。遥かバス停からバスが来たと徳永君が手を振る。それから走ればなんとか間に合う。が、時として一歩及ばずの時がある。その時は、開店前の納屋通りを全速力で走り抜け、朝日通りバス停で追いつく事になる。こんな日は教室に入るなり、弁当を広げて朝食となる。

早朝のランニングは新陳代謝を良くするのか、三時間目が終わると、もうお腹が空く。その時、いつも冗談を言い合っている**有馬寛敏君**の弁当を失敬した事がある。私は盗癖があるわけでは無いが、日頃の冗談の延長みたいなもので、この弁当を食べなければ斃れる、と言う程の空腹でも無い。

ジャンバルジャンは、パン一個盗んで牢獄に繋がれたが、私と寛敏君の仲は、それほど深刻なものでは無い。他家の弁当を食べる機会が無いので、蓋を開ける時のワクワク感がある。どんなおかずが詰まっていたか今は定かではないが、肉厚の椎茸が甘辛く、絶妙の味付けであった。今でも椎茸の煮物を食べる時、この時のことを想い出す。お母さんの手作りの折角の弁当だったので、一粒残さず綺麗に戴いた。御馳走様でした。

四時限目が終わり昼食時間になった時だった。寛敏君が怒っている様な笑っている様な顔で「ハマサーッ」と怒鳴り込んで来た。私の名前はキを省略して、サーッと伸ばす人が多い。ハマサキと、キまで言う人は**大石くん**位だ。サン呼びする人は、ハマサッサンとなる。

さて、ご飯でないといかんという寛敏君を宥め賺し、購買部のパンで勘弁して貰う事になった。「有馬、一つち言わんじ、二つでも三つでも取らんか。どいがえか。おばさん、有馬君にジュースもお願いします」

すると、**有村駿君のお母さん**は「まあまあ、浜崎さんは優しいのね。有馬さん、いいお友達がいていいわね」経緯を知らないお母さんに褒められて照れた。駿君のお母さんこそ優しい方だった。

予餞会で、**吉村弘子さん**が日本舞踊を踊った。予て、威勢よくテニスコートを駆け回っている人とは思えない淑やかさだった。彼女は快活な体育系そのものと思っていただけに、あんな一面があるとは意外だった。

**徳永君**と私は照明係で、二階の袖の最前列から華麗に舞うヒーチャンを照明で追っていた。照明は五段階の調節になっていた。ヒーチャンの舞う姿が観客の皆さん

「もうちょっと、もうちょっとじゃっで気張っが」とヒーチャンへの照明を続けた。踊り終えた瞬間、むき出しになったコードがショートして、パチパチと火花が出た。慌ててコンセントを抜いた。ヒーチャンへの万雷の拍手を聞きながら、僕たちは使えなくなった照明器具をアッチッチ、アッチッチと言いながら片付けていた。

何年前だったか**渡邊美恵子さん**に八期会通信の原稿依頼をした。入院中と知らされ、知らぬ事とはいえ、いらぬ気苦労をお掛けしたのではと文を添え、心ばかりのお見舞いをした。退院された時、お電話を戴いた。大病を煩った人とは思えない明るい声だった。実は彼女の声を聞いたのは、その時が始めてだったような気がする。**渡邊さん**、**桜井敦子さん**、そして**江口恭子さん**、**小山田庸子さん**、**小城美恵子さん**等とは、附小の五年間は同じクラスで顔はよく憶えているのに、可笑しなことだが声の記憶がなかった。

―色白の小柄でおとなしい人―彼女にそう言ったら、

「そんな事ないわよ、私は駆けっこは早いし、お転婆で、いつもワイワイ喋ったり笑ったりしてましたよ」と言われたけれど、本当はとてもシャイな人でした。

入退院を繰り返す彼女の気持を少しでも癒そうと、鹿児島の事や共通の友達の事など彼女が喜んでくれそうな事をいっぱいハガキや手紙、そしてＦＡＸなどで送った。懐かしがっていた鹿児島の食べものも、食べられるかどうか解らなかったけど送った。

さつま揚げを送った時は「久々に鹿児島の味を堪能しました」と、御礼状が届いた。目で見ただけではなかったろうかと切ない気持ちになった。

平成十九年十二月二十六日、**吉田節さん**が帰鹿され、急遽連絡のつく方だけで忘年会となった。彼女のお人柄でしょうか、短時間で十名程が集い、酒の酔いも程よく廻った頃、私に孫誕生の報せが届いた。娘の初産で、女の子だった。丁度その日は、**森繁君**の六十八回目の誕生日でもあった。

手回しよく、**大石くん**がデコレーションケーキをプレゼントしてくれた。ケーキカットの時、おめでとうの歓声にこの上ない幸せを感じた。吉田さんが帰って来たお蔭で皆様に祝って戴き、忘れられない夜になった。その孫も今年一年生です。

その時の事も**渡邊さん**にお知らせしました。数日後、それはそれは可愛いベビー服が届いた。早速、御礼の電話をすると、ちょうど数日前に退院されていてお話しをすることが出来た。直接お話したのはその時が初めてだったが、その後は何度かお便りの遣取りが続いた。タンカンを送った時のことでした。電話があった。

「美恵はもう昏睡状態になりました。本当に永いこと、貴方には気にかけて貰い有難うございました。貴方のお便りがずいぶん美恵の励みになっていました」と、御主人に電話で言われた時には、不覚にも返す返事に詰まってしまった。

彼女とは顔を見て話した事が無いので、頂いたお便りを読み返していると「お蔭さまで元気になりました」とお便りが届きそうな気が今でもする。

**富田郁男君**は、おとなしい生徒だった。映画や音楽の話が切掛けで仲良しになった。学校帰りに誘われて、お姉さんの経営している喫茶店リオに行った。コーヒーのいい香りの漂う雰囲気と音響効果が気に入り、その後リオとは永いお付合いになる。

卒業後は足繁く通った。ウェイトレスのお姉さま達によく悪戯した。銀座の玩具店で買った赤い液の入ったピストル、発射するとシャツは真っ赤に染まる。まあ大変どうしてくれるのと怒っている間に蒸発して元通り。もう一つは万華鏡を覗く所に墨が付いていて、見た後、目の周りが黒い輪になるが、本人は気付かない。

とって置きは、実物そっくりの雲古。色といい形といい、オモチャと気付く人はまずいない。それを丸めたティッシュと床に置いて、ウェイトレスさんを呼ぶ。

「こんな所に、こんなのがありますよ」

彼女はトレーを抱いたまま目を見張って「犬でしょうか」困ったわ、どうしましょうと、あわてふためいていた。

「私が片付けましょう」と、ティッシュで摘まんで灰皿に乗っけたら、言葉にならない悲鳴をあげた。「灰皿に乗すなんて、なんてことするんですか」と怒り出したので、雲古をティッシュで包んで、上着のポケットに入れたら、もう声も出ず、口をポカンと開けたままだった。そんな他愛ない事を一緒に笑った**富田君**は、早くに事故で亡くなった。

**黒木為義君**と三人で、阿久根大島にキャンプに行った事がある。砂浜に寝そべって満天の星空のもと、将来の夢を訥訥と語った彼の夢を今、私は想い出せない。

未だテレビが白黒画面の頃、面白い海外番組が数多く放映されていた。「ルーシーショー」「パラディン」「スパイ大作戦」「ミッチミラーショウ」今や名優名監督と言われるクリントイーストウッドが、未だ青二才のカウボーイ役で「ローハイド」に出演していた頃、「探偵記者ウォルターウィンチェル」も毎週ゴールデンアワーに放映されていた。

その番組は鹿児島の酒造メーカー、小鶴酒造の提供で、コマーシャルに私が出演していた。始めから終わりまで、私一人の主演である。

皮ジャンにブーツ、ヘルメットに身をかため単車でフルスピード、走り終えてヘルメットを脱ぎ、汗を拭きつつ顔がアップ。「今夜の食卓で爽やかな味のメローコヅルをお楽しみ下さい」

そんなコマーシャルだった。テレビデビューは**草野大悟**よりも早かった。当時、体重は五十三㎏、ウエスト七十㎝とスマートなものだった。（四頁の有馬くんと画像参照）「イヨー！【女殺し油地獄】」と、よくからかわれたものだった。

私達の身近なところからニューヒロイン誕生です。

**市来龍作君**のお孫さんの勝みなみさんがバンテリン・レディスカップで、並み居るそうそうたるプロをおさえて優勝しました。

歴代最年少の十五歳二百九十三日の素晴らしい記録です。龍作君のゴルフの的確な指導と熱意が、お孫さんの才能を開花させたのでしょう。将来が楽しみな十五才です。

附中三年の秋、鹿児島市のサッカー大会で決勝戦まで勝ち進み、清水中と優勝を争うことになった。白熱した試合は延長戦に縺れ込み、ロスタイムに得点され、清水中の優勝となった。

その時のメンバーで玉龍に入学したのは、清水中から**谷川**、**江夏**、**川野**、**堀添君**ら、附中からは笛、崎元君等と私です。その中の五人が玉龍サッカー部に入部、昨日の敵は今日の友になりました。その当時は、観戦する人もなく、今日のサッカー人気は、私達の夢でした。

国語甲の授業中のこと、英語の勉強をしていた**渡辺隆則君**は、問答無用とばかりに注意無しで、分厚い教科書で四、五発顔面を叩かれた。

授業後、横暴だと憤慨する**大石くん**と私は、渡辺君を連れて職員室に行き、酒勾先生に謝罪を求めた。始めは、私達までぶん殴られそうな雰囲気だったが『暴力から先生と生徒の信頼は生まれない、ましてや先生への尊敬に念は消え失せてしまう』と**大石くん**が熱弁をふるった。

改めて先生に**渡辺君**が謝罪、先生もやり過ぎを認められて、お互いに今後こう言う事のないようにと約束された。卒業後、その**渡辺君**の消息は知らない。

永年、八期会の中心になって活動している**大石くん**だが、始めは多忙ですんなりといい返事を貰えず、**南郷君**と説得した。後は皆が認める卓越した企画、編集力である。**大石くん**がおらんごっなったらいけんすうかい、と**南郷君**が杞憂する。

平成二十五年十一月、十年振りに浅草雷門の提灯が張替えられ，巾り下げ作業があった。関東八期会の時、雷門の提灯が無かった。京都の専門店で張替え中とのことで、ひと月かかると聞いた。提灯のない雷門は珍しい。あの時から早や十年、その間、親しい友達とのお別れもあった。

**入佐君**は、福岡に居を構えてからご高齢のお母さんを気遣って、ちょくちょく帰って来た。その度に私に会いに来てくれたが、いつも笑顔を絶やさず、いくら飲んでも乱れず、お手本にしたい人柄だった。

**中村修君**は退職後、息子さんのお花の店を手伝っていた。忙しくて、こき使われています、なんて、その繁盛ぶりを嬉々として話してくれた。

温厚で誠実、**川口さん**に継ぐまでも会計係をして下さいました。福岡八期会同窓会では、大変お世話になりました。

**徳田純徳君**は、浜崎製油の工場で一年半程働いた。将来の方針が決るまでここで働くと勝手に決めていた。我が家の家族みたいだった。その後、運輸会社に入社、水を得た魚の如く生き生きとして働いていた。

**有村友宏君**は、八期会五十周年の記念樹を植える際、総てを取り仕切ってくれた。彼は敬虔なクリスチャンだったと、後で知った。我が家の愛猫、チャチャが病気の時、近所の猫好きに堀添犬猫病院を教えてもらった。なんと**堀添君**の弟さんの病院で、奥様は**有村友宏君**の妹さんという、初回から旧知の間柄のようだった。

**牧由紀子さん**の訃報は、**平田瑞代さん**と**吉村弘子さん**から同時に届いた。色の白い涼やかな目元の美しい人でした。**平敷さん**になられてからはお会いした事がないせいか、やはり**牧由紀子さん**と言ってしまう。

卒業五十周年の記念旅行で屋久島に行った時、屋久杉館の案内嬢を見て、一瞬息を呑んだ。五十年前の**牧由紀子さん**がそこにいる。再会と言うには何とも可笑しな話だが、そんな錯覚を起こすほど似ている。私だけだろうか、**牧さん**と感じたのは・・・

屋久杉の説明に聞き入っていた**大石くん**が耳もとでそっと囁いた。「ハマサキ、牧さんじゃっど」・・・

あー！ブルータス、お前もか。イヤ、**大石**も気付いていたのか。写真をいつ撮るか迷っているうちに「ご静聴ありがとうございました。どうぞごゆっくりご観覧下さい」と、案内終了と共に消えてしまった。写真を撮っていたら、どんなに似ていたか証明出来たのに残念！（私の原稿に写真を挿入してくれている**大石くん**にこの話をしたら「ボクのコレクションを捜して見る」と言って見つけてくれたのが左上の写真です。彼女に逢えてよかった）

**伊藤工子さん**が「そのうち、必ず同窓会にお連れします」と言って下さったのですが―三百五十名の卒業生のうち、五十八名の方が亡くなられました。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

除夜の鐘の数、百八は煩悩を表すといいます。百八というのは、四苦八苦と言う言葉と関係があるとも言われます。四×九の三十六と、八×九の七十二を足して、百八。大みそかに百七までを済ませ、年が明けてから百八回目を打つといいます。今の私は、何回目を打ち終わったところなのだろう。

思い巡らし書き綴っていくと、玉龍時代の思い出が『想い』となって際限もなく甦ってまいります。

**玉龍八期の皆様！**

あなたの想い出は、私の人生の何ものにも替え難い大切な心の糧です。玉龍は、心の故郷です。想い出を共有する全ての方々に、感謝の言葉を申し上げます。

## 八期通信アーカイブス

**2005年 第11号**
**中原　真喜子（6組）**

私の住んでおります所は、鹿児島市から車で３０分。今年５月１日より、伊集院町、東市来町、日吉町、吹上町の四町が合併し、日置市になりました。人口５万余、県内５番目の市です。伊集院町に主人と二人、妙円寺詣りでも有名です。遊びにきて下さい。熊本に娘夫婦、孫が男の子二人で、孫の成長がとても楽しみです。

趣味は、書道、和裁、ロマンドール、押し花と、毎日忙しく大変ですが、夢を持ち続け、健康にも注意し、「テゲテゲ」にと気をぬいたりしながら参加しています。書道を始めてから２８年になります。展覧会作品制作等に、日々追われる毎日ですが、苦しみながら続けています。

・筆ん道　こげん険しち　思もせじ
・辛んどん　楽すんもあっ　筆ん道
・どん道も　てげなこっでな　先きゃ見えじ
・書道計画　計画表が　笑でけっ
・書道もせじ　思ばっかいで　だれとけっ

といった具合です。

趣味に楽しみを見つけながら、出会った人達と繋がりを持ち、語り合い、刺激を受けながら、努力をしたいと思います。

「念ずれば花ひらく」「念ずれば実を結ぶ」「なせばなる、なさねばならぬ何事もならぬは人のなさぬなりけり」

まだまだ、今からよ！！と思ったり、体力面、健康面など、もうだめだなあ～と、思ったりする昨今です。